

展覧会について | About

安田祥(やすだ さち)1987、大阪は、2012年に京都造形芸術大学大学院・修士課程を修了し、現在も京都で作陶をおこなう、若手作家であり、これまで個々の「陶」による造形物を集積させ、それらを陶として、また空間や建築の一部として提示するかのような作品を発表しています。

「陶」は多くの建築において「タイル」「陶版」「レリーフ」といった名称・形態によって用いられています。それらは集合体となれば幾何学的な規則性を持つタイルとして、また有機的な意匠を表現するレリーフとして、建築の表面あるいは一部を構成し、都市のあらゆる場所で見受けられる身近なものであるといえます。そしてそれらは個々において具象や抽象といった表現ではなく、ただの機能的・装飾的な資材として認識されています。

安田は「陶でタイルを表現する」といいます。

それは「陶」である。
それは時にタイルと呼ばれるものであるが、タイルという機能や素材として存在するのではない。

あるいはそれはオブジェではない。
それが陶である以上、歪みやムラといったある程度の差異をともなう個性として存在する。同時にそれがタイルである以上、ある程度の規則性を持った集合体として存在する。

それらはタイルとして壁や床あるいは柱といった建築を支持体とし、そこに壁や柱を成し、空間を成す。

では、それは陶でタイルを、陶の集合体として壁を、床を、柱を、建築を「表現」する事になり得るのではないだろうか。

本展は五種・千もの陶のピースを会場に「設置」するもので、ギャラリー空間に続く階段部分をはじめ、柱部分、畳み部分、床部分に大別できるそれぞれは、いずれも所謂「押し型」によつて安田が半年以上かけて制作したものです。(階段上部分設置作品《expansion》のみ2012年制作)

それらはタイルらしくないタイル(状)の様相として、ギャラリー空間の壁や床を成し、そこに陶・タイル・建築・インスタレーションといった固有名詞を持ち難いものとして展開しています。しかし、ひとつひとつのピースに注視すると、それぞれは焼成による歪みやムラを持った「陶」であるとともに、その集合体として「タイル」、柱や壁を構成する点で「建築」、あるいは空間全体を作品とする「インスタレーション」と呼べるものでもあります。

ここで安田は機能・素材としてのタイル

安田祥 | YASUDA, Sachi

「集合体」一部分

タイルらしくないタイル(立体)の形状で壁をうめた、いわゆるレリーフの様な構造をつくる。

個で見れば立体として成立する陶の造形物は、複数で捉えることによって一つの集合体になる。

その集合体は、壁であり、建築物の一部でもあり、空間の一部でもある。

またそれは、平面でもなく、立体でもなく、空間でもない。

言い換えると、タイルでもなく、陶芸でもなく、インスタレーションでもない。

その一つの造形物から始まり、集合体になって、建築物の一部としての壁となる。

建築物の一部として存在するそれらは、ここで完結するものではなく、一部であり、部分的なものになる。

略歴 | Biography

1987 大阪生まれ
2006 大阪府立港南造形高校卒業
2010 京都造形芸術大学美術工芸学科陶芸コース卒業
2012 同大学大学院修士課程芸術表現専攻修了
おもな展覧会

2014 どなり展第7回「井 touch me」
GALLERY h2o・京都
2013 脈 vol.3「う」 Gallery PARC
どなり展第9回「やう」
GALLERY h2o・京都
2012 京都造形芸術大学大学院修了制作展 □ギャラリーオブ・京都
脈 vol.2「めきめ」 □Gallery PARC
京都造形大学大学院 SPURT 展 □ギャラリーオブ・京都
2011 脈 □Gallery PARC
shift □Gallery 馬 北海道
どなり展第4回「井やややや」
GALLERY h2o・京都
bathhouse □Cafe Style Resort in Kyoto SAGANO-YU・京都
2010 Delta □ArtSpace 88・東京
2010 ジン 現代陶芸展 □弘益大学現代美術館 韓国
京料理展 □みやこめしせ・京都
どなり展第3回「れみふあそらしとんぶり」
GALLERY h2o・京都

質疑応答 | Questions and Answers

「展覧会について」

今までの想像を見えるものにしたくて、理想と現実と現状を受け止めて、自身の頭の中をある程度整理した状態にするための機会だと思っています。

「展覧会名「partial」(＝一部分・不完全な)について」

あまり一般的な単語ではなく、一瞬何だかわからない言葉を選んだのは、「何なのだろう?」とほんのり気にしてほしかったから。その対義語は「全部の(total)」とか「完全な(complete)」という完璧なイメージを持つもので、いずれ目指す【全部の】(完全な)何かへの思いも込めて…。

「作品について」

ピース単体ではなく全体として見るもの、捉えるものになりたい。が、やはり完璧じゃないな。という気持ち。

「作品をつくることについて」

ピースだけの美しさや面白さだけでなく、それを集合体として見た時の意外性を発見したいから作品をつくる。

「人に見せることについて」

こんな曖昧なものがあっても良いのか、抽象でも具象でもなく造形物としてもパーツだけでは伝わらない、けど見てもらいたい。気づいてないかもしれないけど、「世の中にはいろんな形が軋がっている」といったことをほんの少しで良いから感じ取ってもらいたくて。

「自分の行為を何と呼ぶのがふさわしいか? 陶芸」

立体と陶と建築の関係は? 見た目が近い感じがする。が、大きさや素材や用途が違う。でもどことなく近いものだと思う。

「立体とは?」

実際に触れる事が出来るし、ものによってはその見る事が出来る。正面というものが決められていない限り、立体でしか出来ない「コト」とはなし。

「陶とは?」

時間によって変化すること。火を通しての変化。土の変化。釉の変化。変わり続けるもの。

「建築とは?」

人の暮らしや活動を支える。崩壊しない限りあり続ける。

「自分の見たいものとはどんなものか?」

建築の装飾で陶(タイル)が目立って存在すること。トルコのブルーモスクなどに使われるタイルは平面的ではあるがその装飾が魅力的で非常に惹かれる。あとはコンサートホールなどの防音壁。

「何が美しいか?」

整列して均等にきれいに並ぶもの。均衡がとれているもの。遠目から見るとコンテナや資材が並んでいる様子や建築資材やビルの窓など。

「何が醜いか?」

「ごちゃごちゃしている様。ごみごみした感じ。」

「何を望んでいるか?」

均衡をとること

「何を恐れているか?」

全てが崩れ去ること

「何を見たいか?」

何もないところ